

まちひとしごと

Vol. 14

くっちゃん羊蹄太鼓保存会

矢吹 俊男さん

人を知り深く学び伝えていく



学

芸員として町職員を務め、退職後も俱知安町の伝統や文化に関わり続ける矢吹俊男さんに話を聞いた。

昭和27年に福島県福島市に生まれた矢吹さんは高校時代までをその土地で過ごし、大学進学のため上京後、昭和53年から北海道で発掘や埋蔵調査の仕事などを行っていたが、昭和63年、当時俱知安町で文化施設建設の話があり、その事業にゼロから関わること、そして何より、それまでの仕事で何度か俱知安町を訪れる中で、その存在感と迫力に魅了された羊蹄山の麓に住めるという条件に興味をひかれ、この町に移り住むことを決意したという。

「それまでは考古学の分野で専門

的な仕事をしてきましたが、町でたった一人の学芸員として、教育委員会の社会教育課へ配属となりました。正直、最初は何をしたらよいかわからず、戸惑うこともありましたが、それでも何とか進めた仕事で、何より地域の人たちとの幅広い繋がりを育ててくれました」

矢吹さんが羊蹄太鼓の創始者である太鼓のロクさん(故 高田緑郎氏)と出会ったのもその頃だ。

「自分自身も、幼い頃に郷土の福島で太鼓の経験があったものの、はじめは、あくまで仕事としての関わりでした」

しかし、ロクさんとその周りに集まる子どもたちとの、世代に捉われずに互いが学び合う姿と、自らも楽しみながら演奏することで、観ている人たちを楽しませてしまう人間的な魅力に感動したことが、羊蹄太鼓を始めるきっかけになったと矢吹さんは話す。

「太鼓のロクさんをはじめ、仕事や趣味を通して出会った地域の人たちから受けた刺激や得たものが、今の自分の根っこにあるんだと思います」

学芸員の仕事というと、資料の収集、保管、展示などモノに関わる仕事と捉えてしまう。しかし、そこには必ずそのモノ自体に関わり、残してきた多くの人たちがいる。

「その人たちと向き合い、教えて

もらうこと。広く浅くではなく、人と関わることで深く知っていくこと。そしてそこで得たものを次の世代に残し伝えていくことが学芸員の仕事だと考えています」

矢吹さんは町職員を退職した現在も町内の小学校や札幌の大学で、自身の学びを伝えている。

「今は、私が俱知安にやってきて得たものを若い世代に伝えることが、この町で出会えた多くの人たちや地域への恩返しになると考えています」

町の無形文化財である羊蹄太鼓の演奏を自身が精いっぱい楽しむことで、見ている人たちにも楽しさを伝えることを教えてくれた太鼓のロクさん。8月5、6日に開催される『くっちゃんじゃが祭り』の中で行われるじゃが百人太鼓では、ロクさんのように自らも楽しみ、見せることで多くの人にこの町の文化を伝える矢吹さんに会えるだろう。